

中学校 国語科学習指導案

指導者 西原 利典

日 時	令和7年7月11日（金） 第3限 10:45～11:35
場 所	多目的教室
学年・組	中学校2年B組40人
単 元	「ヒロシマ」を伝えるルポルタージュを書いて発表しよう
目 標	1 抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにことができる。（知識及び技能(1)エ） 2 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（思考力、判断力、表現力C読むことオ） 3 文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えることができる。（思考力、判断力、表現力C読むこと ア） 4 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。（学びに向かう力、人間性等）

指導計画（全5時間）

第1次：創立120周年記念ピースフォーラム「被爆ピアノ」の演奏を振り返る。（0.5時間）

第2次：教科書教材「壁に残された伝言」を読む。（2.5時間）

第1時 文章の全体と部分との関係に着目して読む。（0.5時間）

第2時 「被爆の伝言」が残ったメカニズムを理解する。（1時間）

第3時 「涙が出た」筆者の思いを読み取る。（1時間）【本時】

第3次：「被爆ピアノ」についてルポルタージュを書く。発表する。（2時間）

授業について

本校は今年創立120周年を迎えて、記念行事として同窓会による「ピースフォーラム」が開催された。その中で「被爆ピアノ」の演奏があり全校生徒が鑑賞した。中学2年生は何を受け取り、何を感じ、何を考えたのだろうか。

本単元で使用する教材「壁に残された伝言」は1999年春に広島市袋町小学校で見つかった「被爆の伝言」についてのルポルタージュであり、2003年に集英社新書「ヒロシマ 一壁に残された伝言」として出版されたもの一部である。

「広島」の「あの日」を思い浮かべることが不可能だった筆者が、取材を通して「涙が出た」という思いに至るまでの過程を説明している文章である。その本文の中で「被爆の伝言」が残ったメカニズムについて科学的、客観的事実の説明を行っている。

「文字の痕跡」としか見ることができなかつた原爆の『遺物』を前に、「あの日」を思い浮かべられない筆者。しかしながら少しづつ「事実」が解き明かされて、一つ一つの物事に真摯な態度で向かい合い、その時々の取材の中でとまどいながら考えを深めていき、そして最後は『遺産』と表現した筆者。筆者の流した「涙」を、学習者は果たして共感できるだろうか。

何気なく聴いた（聴かされた）「被爆ピアノ」に対する初発の印象・感想が、調査・探究を通して「事実」を積み上げることで認識が変容（深化・拡充）し、「被爆ピアノ」を通して「あの日」を「想像」することができる事を期待したい。その活動を踏まえて筆者の「思い」を実感的に理解することができるのではないだろうか。できれば互いに発表し合う活動も入れて単元全体で「読む・書く・聞く・話す」力を総合的に鍛えていきたい。

題 目 「涙」のわけ

本時の目標

- 「あの日」から五十数年後に「被爆の伝言」が発見されたことに対して、筆者がどのような意味を見出しているのか読み取る。(思考力、判断力、表現力)
- 本文の表現を押さえながら「被爆の伝言」に対する筆者の受け止め方の変容を読み取る。(思考力、判断力、表現力等)
- 証言や記憶を表現することで、「他人ごと」から「自分ごと」へと引き寄せる働きがあることを理解する。(学びに向かう力、人間性等)

本時の評価規準（観点／方法）

- 「あの日」から五十数年後に「被爆の伝言」が発見されたことに対して、筆者がどのような意味を見出しているのか読み取ることができた。(思考、判断)／観察
- 「被爆の伝言」に対する筆者の受け止め方の変容を読み取ることができた。(思考・判断・表現)／観察
- 証言や記憶を表現することで、「他人ごと」から「自分ごと」へと引き寄せる働きがあることを理解できた。(学びに向かう力)／観察

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
<p>〈導入〉</p> <p>1.本文「五十数年という時間」の段を読み取る。 (5分)</p>	<p>1.①「五十数年」とは何の時間かを確認する。</p> <p>②そのことを筆者はどのように評価しているかを読み取らせる。</p> <p>・「戦後すぐ」に発見された場合と比較させる。</p>	<p>1.「あの日」から五十数年後に「被爆の伝言」が発見されたことに対して、筆者がどのような意味を見出しているのか読み取ろうとしている。(観察)</p>
<p>〈展開〉</p> <p>2.「無限に連鎖する『あの日』」の段を読み取る。(30分)</p>	<p>2.①筆者の変容を指摘させる。</p> <p>・「被爆の伝言」についての表現が「遺物」から「遺産」に変化していることに気づかせる。</p> <p>②なぜそうなったかを読み取らせる。</p> <p>・「家族などの関係者」が流した涙を筆者はどのように受け止めたかを考えさせる。</p> <p>③「無限の連鎖」とは具体的にどういうことか考えさせる。</p> <p>・「今も続いている」の「今」とはいつかを考えさせる。</p> <p>④自分は共感できるか考えさせる。</p> <p>・「共感できない、しがたい」という返答を期待する。</p>	<p>2.「被爆の伝言」に対する筆者の受け止め方の変容とその理由を読み取ることができた。(観察)</p>
<p>〈まとめ〉</p> <p>3.「伝言」の意味を考える。</p> <p>4.次時の予告を聞く。</p>	<p>3.「被爆の伝言」とは当時の被災者が家族知人に宛てた伝言であると同時に、現在から未来へと語り継がれていくものという意味があることを理解させる。</p>	<p>3.積極的に考えようとしている。(観察)</p>

備考 参考文献『核時代の想像力』大江健三郎（1970年 新調選書）

「壁に残された伝言」(1) 井上恭介

(二〇〇三年集英社新書)

筆者＝放送ディレクター、北海道出身

「あの日」一九四五年八月六日

=

原爆で一面焼け野原・地獄のような光景

→

今、思い浮かべることができるか

筆者＝不可能→取材「伝言」との出会い

【剥がれ落ちた壁の下から】

一九九九年春 袋町小学校

「被爆の伝言」の一部発見

・点検中に剥がれた

・原爆直後に撮った写真があつた

・写真の存在を多くの人が知っていた

↓いくつもの偶然

奇跡的な発見

【白黒逆転のメカニズム】

〈保存の条件〉

第一 煤の上に白チョークで書かれた

第二 伝言がある期間放置された

〈逆転のメカニズム〉

・白いチョークは目立たないので残った

・チョークが煤を保護した

←

上塗りした壁がチョークと一緒に剥がれ、
煤の部分が黒い文字で残った

「壁に残された伝言」(2)

井上恭介 (当時35歳)

【五十数年という時間】(考え方せられた)

「あの日」から「被爆の伝言」
が発見された一九九九年まで

=

被爆体験

○

風化

戦後すぐ
⇒ なまなましい ×

×

反響

【無現に連鎖する「あの日」】

= 今も続いている「伝言」

筆者

↓ 関係ない人々

↓

途方に暮れた遺物

他人」と
立ちつくす
口をつぐむ

→
〈涙〉想像・共感

遺産

自分」と

壁に残された文字

→
「ああそうだったのか」(涙)

家族を探す必死さ、絆の強さ

現実のものとして感じた、衝撃

家族ら関係者

←

第2時

字は白い。当時の状況を鑑みれば、伝言が、黒く煤けた壁に白いチョークで書かれたものであることは明らかだ。ところが見つかった文字は黒かった。壁の下の文字は、どのように保存され、またどういった事情で白黒逆転して現れたのだろうか。

白黒逆転のメカニズム

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下されて、市の中心部は一瞬にして破壊された。そしてすさまじい炎が町を覆った。市内の建物のほとんどを占める木造建築はことごとく焼きつくされた。

伝言が見つかった広島市立袋町国民学校西校舎は、鉄筋コンクリート三階建て。爆心地から僅か四百六十メートルの地点にあって、辛うじて焼け残った。付近で残った建物は数えるほどしかない。西校舎は、一九三六年に建てられた、最新の設備を誇る建物だった。地上三階地下一階、水洗トイレ完備のモダンな建物は、当時通っていた子供たちの自慢だったという。

鉄の窓枠は校庭に吹き飛ばされ、床や黒板や壁の木材は焼き払われたので、残ったのは「打ちっぱなし」のコンクリート部分だけだった。

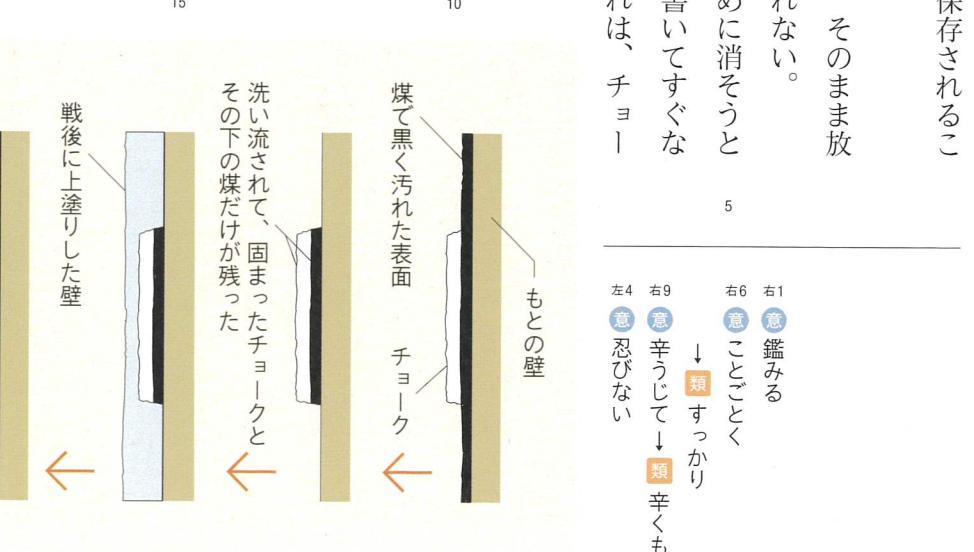
しかし、雨露を防げる建物はなにしろ貴重だったから、校舎は原爆が落とされた直後から臨時の救護所となつた。重傷を負った人たちが次々と運び込まれた。横たわる人の中に知り合いはないか。探している人に関する情報はないか。行方知れずの人の消息を求めて多くの人が訪れたと考えられる。

このとき、校舎の中の壁は、廊下や壁に貼られていた松の板材が焼けたときの煤で真っ黒になつていた。そして、床にはチョークが転がっていた。伝言が、凹凸の少ない、真っ黒なコンクリートの主成分（硫酸カルシウム）が、空気中の水分を吸って変質するからだ。

戦後、校舎の補修で壁が塗り直された時期は定かでない。早くても、校舎で授業を再開するために救護所が閉じられた一九四五年の十一月以降である。少なくとも放置期間は数か月以上。チョークが固まるのに十分な時間があったことになる。チョークの伝言がある期間放置されたこと。これが、伝言が保存されることになった第二の「条件」である。

では、補修はどのように行われたか。古い壁の上に新しい壁を塗る場合、ふつうは新しい漆喰のりがよくなるよう、いたん壁を洗い流してから塗るそうだ。ただ、壁を洗い流すといつても、こびりついたチョークをそぎ落とすにはかなり手間がかかる。しかもついているチョークは白いから、煤を洗い流して白くなつた壁の中ではそれほど目立たない。少し盛り上がっており、塗り直しにもほとんど支障がない。こうした事情が重なつて、チョークは壁に残つたのである。

チョークで書かれた跡が黒い文字として現れたメカニズム



右4【メカニズム】しくみ。仕掛け。
右8【国民学校】一九四一年に、それまで尋常小学校と呼ばれていた初等教育の学校を改称したものの。一九四七年からは小学校と呼ばることになり、現在に至る。
右11【モダンな】(その当時として)現代的な。
右12【打ちっぱなし】コンクリートの表面に仕上げを行わずに、そのまま仕上げ面とすること。
左8【硫酸カルシウム】焼き石こうとも呼ばれる物質。水を加えると固まる。
左15【漆喰】壁を塗る材料。石灰に粘土を加え、ふのりを溶かした液体で練つたもの。

右12【打ちっぱなし】コンクリートの表面に仕上げを行わずに、そのまま仕上げ面とすること。
右11【モダンな】(その当時として)現代的な。
右12【打ちっぱなし】コンクリートの表面に仕上げを行わずに、そのまま仕上げ面とすること。
左8【硫酸カルシウム】焼き石こうとも呼ばれる物質。水を加えると固まる。
左15【漆喰】壁を塗る材料。石灰に粘土を加え、ふのりを溶かした液体で練つたもの。

右4【メカニズム】しくみ。仕掛け。
右8【国民学校】一九四一年に、それまで尋常小学校と呼ばれていた初等教育の学校を改称したものの。一九四七年からは小学校と呼ばることになり、現在に至る。
右11【モダンな】(その当時として)現代的な。
右12【打ちっぱなし】コンクリートの表面に仕上げを行わずに、そのまま仕上げ面とすること。
左8【硫酸カルシウム】焼き石こうとも呼ばれる物質。水を加えると固まる。
左15【漆喰】壁を塗る材料。石灰に粘土を加え、ふのりを溶かした液体で練つたもの。

ここで注目すべき点は、チョークが残った部分の「チョークの下の壁」は黒いということだ。

五十数年間、チョークが壁の煤を、その部分だけ保護したことになる。文字が黒かったのは、チョークで書かれた文字によって守られていた煤が現れたからだ。ちなみにチョークそのものは、剥がれ落ちた壁にくつづいて取り除かれた。これが、チョークで書かれた伝言が保存され、白黒逆転して現れたメカニズムだ。

五十数年という時間

「被爆の伝言」が発見された年の夏、新聞、テレビなどのマスコミは、この話題を大きく取り上げた。報道をきっかけに「あの日」以来会えずに入った、伝言を書いた教師と、伝言に書かれた教え子が五十数年ぶりに再会するというニュースが話を更に盛り上げた。建物そのものの永久保存を訴える声、他にもまだひっそりと眠っている伝言があるのではないかという声がわきあがつた。このような反響を受け、校舎の建て替え計画は変更され、校舎の一部保存と、伝言を見つけるための調査を行うことが決定された。戦後に塗られた壁を剥がして、文字を探すという前代未聞の調査である。

詳細な調査の結果、新たに文字が見つかったのは、最初の場所の近くにもう一か所。板壁を上から貼ったところで数か所。そのうち伝言がまとまって見つかったのは、一か所だけだった。

これを多いとみるか、少ないとみるか。伝言を校舎のあちこちで見たと記憶していた人にすれば、もっとあつたはずだという思いは強いだろう。しかし、もともと全て失われていたと考えられてきたことを思えば、成果は大きかったとみてよいのではないか。

考えさせられたのは、発見された伝言が多いか少ないかということよりも、それらの伝言が五

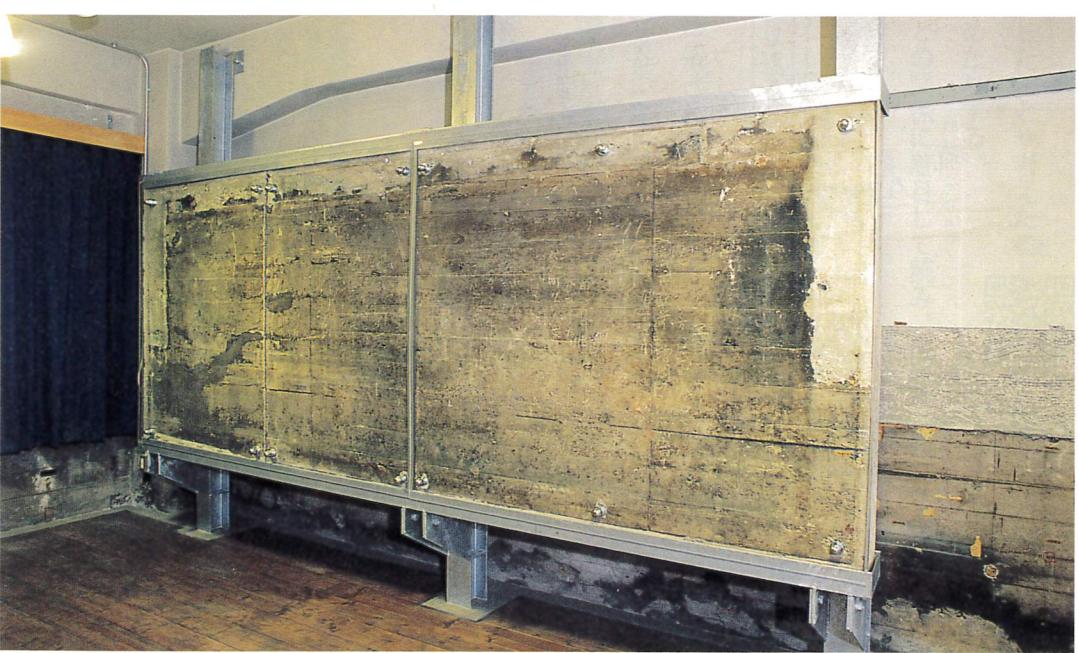
十数年という時間を超えて出てきたことの意味だった。

もし戦後すぐに見つかったとしたらどうであったろう。あの日をなまなましく語れる被爆者がおおぜいいて、被爆した建物や遺跡もまだ市内のあちこちに残っていたときなら、これほど大きな反響を呼ばなかつたのではないか。市内に残る被爆建物が僅かになり、被爆体験の風化が呼ばれる二十世紀の終わりだからこそ、これほど注目されたのだ。

無限に連鎖する「あの日」

原爆の直後、愛する人の行方がわからず、必死で探す人が書いた伝言の文字には、何が写されているのか。発見された伝言を取材者として初めて見たとき、私は正直途方にくれた。貴重な原爆の遺物であるという意味で迫力は感じた。だが、何が書いてあるのか文字を追うのが容易ではない。どこからどこまでが一つの伝言なのかもわからぬ。名前はいくつか読めるが、書いた人の名前なのか、探している人の名前なのかもわからない。その人がその後どうしたのかはもちろんわからない。

しかし、取材が進み、家族などの関係者が見つかった、彼らと一緒に書かれた文字の前に立ったとき、驚くべきことが起こった。彼らはいつも簡単にそのかすれた文字を読み、「ああそうだったのか。」とつ



「伝言文字」が書かれている壁
現在、袋町小学校平和資料館に保存されている。

左6 左2 右12
意 意 意 前代未聞 ↓
意 風化 なまなましい
未曾有

ぶやいた。そして涙を流した。

それを横で聞きながら私は、もう一度、その文字を眺めた。涙が出た。

書家でもなければ芸術家でもない人が書いた、しかもただ人を探すという目的のために書いた、文章ともいえない文字が、人の心をこんなに揺さぶるのか。半世紀の時を超えて、伝言の文字の中から「あの日」があふれ出た瞬間だった。

そして伝言に刻まれた「あの日」のことは、その話を聞いた多くの人々に伝わっていった。伝言のある場所に、直接には関係ない人々が集まってきた。人々は文字の前で口をつぐみ、立ちつくした。

「被爆の伝言」。それは現代の私たちに、あの日のことを静かに、力強く語ってくれる遺産であり、証人なのである。伝言の「あの日」が伝わっていく無限の連鎖は、今も続いている。

（出典『ヒロシマ——壁に残された伝言』を書き改めたもの）

	【著者】井上恭介（いのうえきょうすけ）
一九六四（昭和三九）年—	放送ディレクター。北海道の生まれ。
【著書】『里海資本論』『牛肉資本主義』『なぜ同胞を殺したのか』『ポル・ポト——墮ちたユートピア』など	（共著）など

80 獄 ▼ ゴク	80 被 ▼ ヒ	80 剥 ▼ ハク	80 替 ▼ タイ	81 痕 ▼ コン	82 炎 ▼ エン	82 露 ▼ ロ	83 硫 ▼ リュウ
はははははははは はげはげはげは	こうむる	はははははははは はげはげはげは	かかわる	いたす	ほのほの	ロウ	リュウ
81 審 ▼ リョウ	81 致 ▼ いたす	81 痕 ▼ コン	82 扌 ▼ ハツ	82 露 ▼ ロ	82 硫 ▼ リュウ	83 硫 ▼ リュウ	
はははははははは はげはげはげは	かかわる	はははははははは はげはげはげは	はらはら	つろ	はらはら	はらはら	



私の一一本棚

平和へのまなざし
ヒロシマ——壁に残された伝言
井上恭介

ハンナのかばん
カレン・リーピン
この世界の片隅に
こうの史代

【訳】石岡史子

ハンナのかばん
カレン・リーピン
この世界の片隅に
こうの史代

【訳】石岡史子

壁に残された伝言
ヒロシマ——壁に残された伝言

QRコード

壁に残された伝言

学びの道しるべ

構造や内容を捉える

- ◎ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結びつけ、自分の考え方を広げたり深めたりする。
- 文章の全体と部分との関係に着目して読み、内容を理解する。
- 「壁に残された伝言」での学習を通して、学んだことを自分の言葉でまとめよう。
- 振り返りのキーワード 筆者の思い・伝言

学びを振り返る

- 1 「伝言」が「発見された経緯」と「白黒逆転して現れた事情」について、時間の流れにそって、それぞれ箇条書きにして整理しよう。
- 2 伝言の関係者たちが「いとも簡単にそのかすれた文字を読み、『ああそうだったのか』とつぶやいた。」（85ページ・19行め）とあるが、それはなぜか話し合おう。
- 3 「伝言の『あの日』が伝わっていく無限の連鎖は、今も続いている。」（86ページ・10行め）にこめた筆者の思いについて話し合おう。

学びを広げる

日常生活において、「文字」とはどのような点で必要なものか。次の条件に従って、自分の考えをまとめよう。

条件1 「文字」がどのようにときに必要かを含めること。

条件2 「メモ」「手紙」「看板」「SNS」などの具体的な例をあげて書くこと。

自分の考えを深める

- 1 「伝言」が「発見された経緯」と「白黒逆転して現れた事情」について、時間の流れにそって、それぞれ箇条書きにして整理しよう。
- 2 伝言の関係者たちが「いとも簡単にそのかすれた文字を読み、『ああそうだったのか』とつぶやいた。」（85ページ・19行め）とあるが、それはなぜか話し合おう。
- 3 「伝言の『あの日』が伝わっていく無限の連鎖は、今も続いている。」（86ページ・10行め）にこめた筆者の思いについて話し合おう。

実践上の留意点

1. 授業説明

文章を読んでその内容をどれだけ実感的に理解できるか？具体的には本教材において「壁に残された伝言」（文字）を見て涙を流した筆者の思いにどこまで迫れるかをねらいとした授業であった。

今年は被爆 80 年にあたる。広島市では毎年 8 月 6 日に平和記念式典が開かれ、市内の小学生は 5 年生で全員「平和への誓い」を書き（書かされ）その中から代表者 2 名が選ばれ、6 年生で平和記念式典の中で読み上げる。風化させないという取り組みの一つである。本校の中学生もおおむねこの活動を経験している。それでも本文教材との隔たりは大きいと感じる。本授業の最後に「自分は筆者に共感できるか」を考えさせ、「共感できる」という優等生の答えではなく、「共感できない、しがたい」という本音を引き出したかったが、板書の量が多く、時間が足りなくなりこの発問はできずじまいとなった。

筆者はなぜ涙を流したのか？それまで筆者は「被爆者の話や姿、被爆直後の写真、資料館に展示されている黒焦げの弁当箱やぼろぼろの衣服。そのような断片を自分で貼り合わせてみたものの、それが本当にあの日の広島なのか、とうてい自信はもてなかつた。」と述べている。それが最後に「家族などの関係者が見つかって、彼らと一緒に書かれた文字の前に立ったとき、驚くべきことが起こった。彼らはいとも簡単にそのかすれた文字を読み、『ああそうだったのか。』とつぶやいた。そして涙を流した。それを横で聞きながら私は、もう一度、その文字を眺めた。涙が出た。」と述べている。前者と後者の違いは何か？「文字」であること。そして「伝言」であること。誰かに何かを伝えたい、書いた人の相手に対する思いが込められ、受け取る人がいることで「伝言」は成立する。受け取った人はそこに生きた人間を見て、感じて心が揺さぶられる。文字には、言葉にはそんな力があるのだ、ということを学んでほしいと切に願った。

このことは言葉によるコミュニケーションの基本的な機能である。SNS などで言葉を簡単に発信できる環境にある学習者にとって、「伝える」と同じくらい「受け取る」ことの大切さを考えさせたいと思うが、授業の実際ではそこまで至らなかった。

2. 研究協議

研究協議において、「涙」にこだわらない方がいいのではないかという意見が出た。筆者がどういう心情であったかを問うのは難しい、学習者は表面上読み取っても、筆者に共感することはできない、という理由である。この教材では、筆者への共感を求めるのではなく、少し距離を置いて『伝わる』とはどういうことか、「伝わったものは何か」を考えさせるほうが指導として適しているのではないか、との指摘があった。

また、筆者自身も体験していないことをどのように後世に伝えていくかとしているのか、その書きぶりにも着目することも国語科の重要な学習課題として成り立つのではないか。戦争や被爆を体験した方はかえって「ヒロシマ」を語りにくい、語ろうとしない。体験していない世代がどう語り継ぐのか、記憶を継承していくのか、伝え方、語り方を意識させ、身に付けさせることも大切である。そのことは古典が今の自分たちにどうかかわるのかにも通じるものと思われる。